ミルクプリンセス
ラブラブにゅ～トピア
小説 神崎美宙
挿絵 大空樹
立ち読み版

登場人物紹介

Characters

ステラ＝リリィ＝ガトーマリティエ

敵国に囚われていたところをアキラに助けてもらったお姫様。物静かで礼儀正しい性格で、助けてくれたアキラに恋心を抱いている。Cカップ。

ローズマリー＝アンジェリカ＝ガトーマリティエ

ステラと同じく、アキラの手で助けられたお姫様。ステラの妹で、アキラに感謝しつつも高飛車な性格のせいで素直になれない。Gカップ。

たっぷりと
ご奉仕させてください……。

わらわを母親だと思って
甘えていいのですよ。

シェリス

クリスティナに仕えるメイド長。仕事のできるクールビューティ。英雄となったアキラに対して、身体を使って奉仕する。Dカップ。

アキラ＝リョウ

軍事大国ソドムで牢屋番をしていた少年。母国の卑怯なやり方に耐え兼ね、反逆する。

クリスティナ＝テレイジア＝ガトーマリティエ

ステラとローズマリーの母親にして、クレージュ王国を治める女王。母性的な女性で、娘を助けてくれたアキラを自慢の爆乳からあふれるミルクでもてなす。Ｉカップ。

序　章　007
第一章　ロイヤルミルクティー　015
第二章　女王様と初体験　052
第三章　ミルクご奉仕でおもてなし　091
第四章　お姫様の初ミルク　134
第五章　ミルク風呂にて　166
第六章　ラブラブにゅ〜トピア　210
終　章　248

ローズマリーもかなりのサイズの巨乳の持ち主だったが、それよりもさらに二回りほど大きくまさに爆乳と呼ぶに相応しい圧巻の乳房だ。

聖母のようだと思っていた淑女だが、肉感的で成熟した大人の色香をまとうその豊満な肢体は見れば見るほど強烈な異性を感じる。恋人どころか母親の顔すら記憶にない童貞少年は、不敬だとは思いつつもその魅惑的な乳果実から目を離せなかった。

「そういえば騎士団のもの達が褒めていましたよ。わざと峠道を使って、遠回りしたんですって？　まっすぐクレージュを目指していたら追っ手に捕まっていただろうって」

「あ、はい！　あ、いえ……たまたまです……」

他人から見られることに慣れているのか、不躾な視線を咎めることもせず微笑んでいる女王陛下から声をかけられたところでアキラは我に返る。

「謙遜することないわ。貴方の機転がわらわの娘とこの国の未来を救ったのです」

砦を脱走した翌日に国境付近に何度もソドムの軍勢が慌ただしく姿を現したとの報告が斥候から入っていたようだ。当然王女達を発見できず、特に戦闘には及ばず引き上げていったそうだが。

惜しみない賛辞の言葉をいただき嬉しいが、緊張と照れで言葉に詰まる。

「そうなんですか……アキラさんすごいですね」

ステラは目をキラキラと輝かせながら感心したようにため息をつく。

「おかげで一週間も馬車に乗りっぱなしで、腰が痛くなりましたわ。あんな乗り心地の悪

い馬車に乗ったのは生まれて初めてですわよ」
「それは……申し訳ありません……」
さすがに王家が使う高級馬車と乗り心地を比べられては困る。あの時は形振り構っていられなかったし、囚人護送用の馬車だからこそ怪しまれずに砦の付近を走破できたのだ。
あんな辺境の地を王族専用馬車が走っていたら怪しすぎるのだが、王女様に口答えするわけにもいかず少年は頭を下げた。
「べ、別に……アナタを責めているわけではなくて……それよりお茶はまだですの？」
俯く恩人を見て妹姫は慌てて言葉を濁し、話を変えようとする。
「そうね。まずはお茶にしましょう。シェリス、アキラには例のものを」
「はい、かしこまりました」
女王が手を叩くとメイド達が露台に茶器を運んできた。そして少年をここまで案内した黒髪のメイドがクリスティナ、ステラ、ローズマリーの順に紅茶を注いだティーカップを差し出した。そしてアキラの前にも同じくカップが置かれるが中身は空のまま。
「アキラ様、失礼いたします……」
シェリスと呼ばれた侍女はスカートの裾を両手で摘んでお辞儀をすると、白と黒を基調としたメイド服の胸元に手をかけた。胸布が引き下ろされ、ブラに包まれたおっぱいが露わになる。
「へ？　え、えぇぇぇぇっ！　な、なな……何を、してるんですかっ!?」

王族が使うティーセットでお茶なんて飲んでいいのかと考えていた少年は、突然服を脱ぎだした侍女の行動に面くらい素っ頓狂な声を上げた。
「今お茶をお注ぎいたしますので、しばしお待ちくださいませ」
「お、お茶……？」
黒髪のお姉さんは躊躇うことなく、自然な手つきでブラのカップに手のひらを滑り込ませて片乳を取り出した。形のいい綺麗な乳房と先端でツンと尖るピンク色の乳首が惜しげもなく目の前に晒される。
（お、おっぱいだ……女の人のおっぱいだ……）
何が起こったのか分からずポカンと口を開けてしばし生まれて初めて見る生おっぱいと乳首に見惚れてしまった。メイドのお椀型の乳房は見れば見るほど美しい形をしている。
眺めているだけで胸の鼓動は高鳴り、なんとも言えない幸せな気分になってくるから不思議だ。
「シェリス、少しお待ちなさい。アキラは特別なお客様ですから、やはりここはわらわが直接もてなしましょう」
「かしこまりました、陛下」
侍女はすぐさま隙のない動作でブラをつけ直しメイド服の胸元を整える。そして新しいカップをクリスティナの前に差し出した。
「いくらなんでもわざわざお母様がミルクをお出しになることはありませんわ」

「何を言っているのです。娘達の命の恩人ですよ。母親のわらわがお礼をして当然です」
娘の言葉など気にした様子もなく、クリスティナはロングドレスの胸布に手をかける。
「え、え、え……あ、あの……」
何が起こっているのか理解できず呆然としていると、淑女は優雅な仕草で横へとスライドさせた。しなやかな指先のかかった薄絹が乳肌の上を滑っていき、聖母のように感じた第一印象とは対照的なアダルティな漆黒のブラジャーに包まれた豊乳が弾み出てくる。
（う、うわ！　女王様の、お、おおっ……おっぱいっ！　デ、デカい……）
三十二歳という女性として成熟した大人の乳房からは濃厚な色香を漂い、少年は無意識のうちに高級そうな細かなレースで薔薇の模様をした胸布を凝視していた。いや正確にはその奥に隠れたヤシの実のようなたわわな乳果実を。
ぷるんぷるんと揺れる爆乳はとにかく柔らかそうで、不敬とは思いつつも猛烈に触ってみたい衝動に駆られる。シェリスのおっぱいは美しかったが、女王の胸は完全に牡の本能を刺激する魔性のおっぱいだった。
「あらあら……もうわらわも若くないから、そんなに見つめられたら恥ずかしいわ」
などと言いながらも女王はまるで見せ付けるかのように、ゆっくりとカップも引き下ろしていく。
「あぁ……」
思わず感嘆のため息が口から漏れた。

少々先端が外側を向き重力に負けかけているが、スイカほどもあるサイズを考えれば仕方ない。むしろこれだけの大きさを誇りながら形は崩れることなく美しい曲線を描き、大きめの乳輪と中心の尖りは綺麗なピンク色をしているのだから奇跡のバストと言っても過言ではないかもしれない。

肌もミルクを溶かし込んだかのようになめらかで、見るからに極上の触り心地を味わえそうだ。これだけの美しさを維持し続けるには、相当の努力と苦労、そして金のかかっていることだろう。まさに超高級品のおっぱいだ。

「すぐにミルクを淹れてあげますからね……」

「ミ、ミルクっ⁉　ですか……？」

「そうですよ。クレージュの女性は年頃になると自然とミルクが出るようになります。自らのミルクでお客をもてなすのは淑女の嗜みです。逆に射乳を迎えていない女子は大人のレディとは呼べません」

クリスティナはまさにミルクタンクと呼ぶに相応しい爆乳に十本の指を食い込ませ、牛の乳を搾るかのような手つきで揉み搾っている。

「そ、そうなんですか……」

頭は混乱するばかりだが、視線はしっかりと女王様のおっぱいを凝視していた。王女達はというと上品な仕草でティーカップを口元に運び、紅茶を味わっている。

「この国では賓客の方を最大級におもてなしする時には、生搾りミルクをお出しすると決

まっております」

少年の疑問を察したらしいメイドが説明してくれた。からかわれているのではと思ったが、冗談で女王がこんなことをするはずもない。

「もちろん本当に特別なゲストに限りますけど。アキラは娘達の恩人なのですから、当然の扱いです」

「あ、ありがとうございます……」

当然のように言い放たれて、恐縮しつつアキラは頭を下げる。とりあえず歓迎されていることは分かったが、文化の違いとは恐ろしいものだ。

「んっ……はぁンっ……」

軽く放心していると、女王の熱っぽい吐息が聞こえてくる。仄かに頬を赤らめてはいるが、異性に乳房を晒し両手で揉み搾っている姿には驚かずにはいられなかった。

「あぁ、出ますよ……すぐに飲ませてあげますからね……」

真っ白だった女王の乳房は徐々に桜色に染まり、心なしか乳輪がぷっくりと膨らみ乳首も大きくなっている。

「ンっ！　あ、はぁンっ……出ますよ、わらわのミルクが……たっぷりと出してあげますからね……見ててちょうだい……あぁンっ！」

美女は少し前かがみになると乳房の先をティーカップへと向ける。ピンク色の乳首の先端に白い水玉が滲み出てきたかと思ったら、勢い良く噴き出しミルクが迸った。

ぴゅるっ、ぴゅっ……ぷしゃぁぁ〜〜〜……。
女王が両手で揉み搾るたびにティーポットから紅茶を注ぐかのごとく、綺麗な一本の糸のような飛沫が容器の中に吸い込まれていく。
「はンっ、ミルク出てますよ……ダメ、止まりませんっ……」
巨大な乳房からは次々にミルクが溢れてきてカップをあっという間に満たした。
「……はぁはぁ、さ、さあ……アキラ、できましたよ」
生ミルクがなみなみとカップに注がれると、すぐに黒髪のメイドがハンカチでクリスティナの濡れた乳首を拭い、テーブルに飛び散った雫も拭き取る。
「さすがお母様……綺麗なお手前です」
ステラは感心したように目を丸くしていた。
「ふふ……これくらい当たり前ですよ。二人とも励みなさい」
「分かっておりますわ」
クリスティナはドレスの胸元を直しながら娘達に視線を向ける。
大人のレディの嗜みと言っていたが、王女達も誰かにミルクを飲ませることもあるということだろうか。などと考えているとシェリスが例のティーカップを運んできて、アキラの前に差し出した。
「どうぞ、アキラ様。王族の方がお搾りになったものは特にロイヤルミルクティーと申しまして、どんな山海の珍味よりも美味と言われております」

「は、はぁ……」
なんだかとても光栄なことらしいが女性の生おっぱいを見て、嬉しいやら恥ずかしいやらで頭の中は正常に思考が働かなくなっている。異性と付き合ったこともなければキスもしたことのない童貞少年にいきなり生搾りミルクを飲むなんてハードルが高すぎる。
「あら、どうしました？」
ミルクと女王の顔を交互に見つめながら途方に暮れていると、淑女は不思議そうに首を傾げた。
「あ、いえ……女性のミルクを飲むのは初めてで……」
「そうだったの。遠慮しなくていいのよ」
これがこの国では最高のもてなし方なら、飲まないと失礼になってしまう。
「い、いただきますっ……」
意を決した少年は恐る恐るカップに口をつけた。そして一気に飲み干す。
甘くて口当たりのいいサラサラとした液体が喉を潤していく。
「ちょっと、下品な飲み方ですわね……」
「す、すみません……」
「気にしなくていいのよ。さすが男の子ね、いい飲みっぷりですこと」
ローズマリーがやれやれといった様子でため息をついている。しかし美女は咎めることもせず小指を口元に当てて微笑んでいた。

「美味しかったですか、アキラさん？」
「はい……ごちそうさまでした」
「そうですか、それはよかったです」
女性のミルクなんて初めて飲んだが悪くない味だった。むしろ結構美味しい。素直に感想を言うとステラは、まるで自分が褒められたかのように嬉しそうに笑っている。
その天使のような笑顔を向けられると自然とこちらも口元が緩んでしまう。
「まったく！　すぐにヘラヘラしてっ……」
巻き毛の王女は不満げにツンとそっぽを向いて、紅茶の入ったティーカップを口元に運んでいた。
「ふふ、喜んでもらえて何よりですよ。おかわりなんていかがかしら？」
「え、おかわりですか？」
「そうよ。気に入ってもらったみたいだし、好きなだけ飲んでいいのよ」
ミルクを飲ませてくれるということは、女王はまた胸をはだけて直接搾ってくれるということだろうか。それならあのおっぱいを生で見ることができる。
（うわ、何を考えているんだ僕はっ！）
咄嗟に浮かんだ妄想をかき消し、慌てて平静を装う。
「もしかして美味しくありませんでしたか？」
少年の反応が薄いせいでドレスの胸元に手をかけていた女王の動きが止まる。

「そうそう、ペニスの先端を少し下げながら挿入するイメージですよ」
破瓜の痛みを和らげようと両手で娘の乳房をこねながら、結合部を覗き込んでいるクリスティナがアドバイスをしてくれる。
ズブッ、ズブゥゥ、ズニュゥゥゥ――――ッ！
おかげであまり経験のない正常位のような座位に近い体勢での結合も、スムーズにペニスは処女肉の中へと埋まっていった。
「ンあっ、あぁぁっ……アキラが、入ってきますわぁっ……」
今まで経験した女性の中で間違いなく一番狭い膣壁を押し広げながら怒張が身体を貫き、王女は目尻に涙を浮かべながら苦悶の表情を浮かべる。それなのに少年に気を使っているのか、プライドが許さないのか痛みを口にしない。
（あぁ、すごいヒダが絡みついてきて、気持ちいいっ……）
激しい締め付けを受けながら膣穴をかき分け、ペニスは奥へと侵入し続ける。そしてついには処女の証である薄膜を突き破り、男根は根元まで深々と王女の膣内に埋まった。
「ううっ！　はぁっ……い、いっ……はぁ、くぅっ……」
言葉にならない声を上げながら金髪少女は身体を硬直させる。しかし柔らかい膣肉はペニス全体をグイグイと締め付け、思わず吐精してしまいそうになるくらい気持ちいい。
「ローズマリー様……奥まで入りましたっ……」
処女とのセックスは初めてで、男では想像もつかない破瓜の痛み。その激痛に耐えてい

る王女の脂汗が滲んだ額には前髪がべったりと張り付き、瞼をギュッと瞑っている姿に愛しさがこみ上げてきた。

「ほ、本当ですか……はぁ、うっ……これでわたくしはアキラのものですわ……」

初めはあまり心を開いてくれなかった王女がこうやって自分と身体を重ねて嬉しそうにツリ目を細めている。こんなに嬉しいことはない。

「おめでとう、マリー。どうですか、好きな人に処女を捧げた気分は？」

「もうお腹がアキラでパンパンになってて……こんな、恥ずかしい思いをしたのは生まれて初めてですわ……でも、悪くありませんわ……」

母に祝福されて一瞬だけ泣き笑いの表情を浮かべたローズマリーだが、照れ隠しなのか頬を膨らましてそっぽを向いてしまう。

「ふふ……恥ずかしいだけではありませんよ　愛しい殿方と一つになって、膣奥にその存在を感じる……女として最高に幸せな瞬間でしょう？」

「はぁ、あぁっ……一つに……女の、幸せ……ですの……」

耳元で囁かれた言葉を噛み締めるように復唱しながらローズマリーは、ルビーのような綺麗な瞳で少年の顔を見つめた。

（ローズマリー様……か、可愛いなぁ……）

普段ツンツンとしているせいで、年頃の少女らしい仕草を見せられるとそのギャップで激しく男心がくすぐられる。

「あ、ひぃンっ……い、いいですわよ……アキラの好きに動いてぇ……」
無意識のうちに腰が律動を刻み始めると、王女は甲高い悲鳴を上げた。当然まだ破瓜の痛みの癒えていないローズマリーは、突然肉棒で膣内をかき回され黄金の巻き毛を振り乱しながら悶えている。
「きゃっ……あぁ、あっ……アキラ、熱いっ……ひぃン！」
先日童貞を卒業したばかりの少年に処女に対する気遣いを期待する方が難しい。頭では分かっていても身体は勝手に動き出し、若さに任せた荒腰を使いだそうとしたところ女王が待ったをかける。
「アキラ、少し落ち着きなさい。女子は優しく扱わなければダメですよ」
そう言うと娘の乳房を揉んでいた両手を彼女の脇の下から引き抜き、優しく少年の頬を包み込んだ。
「は、はぁ……も、申し訳ありませ……んむ！」
淑女は娘越しに少年に口付けをする。すぐに舌が口内に侵入してきて、高飛車王女と繋がったままその母親とキスをしている状況に、興奮はさらに高まっていく。
「ちょっと！　お母様っ……はンっ、な、何をしているんですのっ!?　アキラもわたくし以外の人とキスするなんてっ……」
慌ててお姫様は少年の胸を押して二人のキスを中断させた。あの高飛車王女が嫉妬のせいで口を尖らせている姿を見ると、なんとも甘酸っぱい気持ちになる。

「ふふ、これは指導ですよ。さあ、アキラ。浅い位置でゆっくりと挿入を繰り返してみなさい」
「はい、かしこまりました……」
言われた通りに一度王女の膣から抜け落ちそうな位置までペニスを引き抜き、亀頭が埋まる程度の挿入を繰り返した。
たっぷり溢れてくる愛液で濡れた膣肉が敏感なカリに集中して絡みつき、気持ちいいがもどかしくて一気に根元までねじ込みたい衝動がこみ上げる。
「これのどこが指導なんですのっ……あ、あぁン！」
不満を露わにするローズマリーだったが、少年が女王に言われた通りにピストンを刻み始めると自慢の爆乳がぷるんぷるんと揺れるほど身体を仰け反らせて喘いだ。
「ほら、さっきより気持ち良くなったでしょう？　おっぱいだって、こんなにパンパンに張って……」
クリスティナは王女のドレスの胸元を完全にはだけさせて、発育過多気味な乳房を取り出し再び両手で揉み搾り始める。すぐにピンク色の乳首の先にはミルクが滲み、白い飛沫が向かい合っている少年の胸に飛び散った。
「きゃふ、ンっ、んんっ……む、胸はやめてくださいっ……あぁっ……」
膣を肉棒で貫かれて母親からは乳房を愛撫され、あの気の強いローズマリーが息も絶え絶えになりながら身悶えしている。アキラは無意識のうちに目の前で揺れる爆乳に手を伸

ばしていた。腰を振りながら王女の乳房を鷲掴みにした少年の手にクリスティナの手が重なる。
「アキラまで、なんですのっ……あンっ、そんなに強く揉んだら……ひぃあ、ミ、ミルクが出てしまいますわっ……」
反射的に少年の腕を掴んだが、彼女は本気で嫌がっていない。それを本能的に感じ取ったアキラはますます腰の動きは激しくした。その証拠に少女の喘ぎ声は最初の頃より艶を帯び、険しかった表情もどこか蕩けたように柔らかくなっている。
王女を感じさせている悦びに浸りながら、張りがあって弾力のある最高の揉み心地を誇る爆乳を夢中になって揉み搾った。
「はぁンっ……いきなりぃ、あ、あぁっ……胸は、ダメですわぁ……」
乳房からミルクを搾られながら膣を肉棒で抉られ、ローズマリーの桜色に上気した肌には汗が滲み蒸れた甘酸っぱい体臭が充満していた。
「ローズマリー様っ……とても気持ちいいですっ！」
普段見たこともない王女のあられもない姿にますます興奮をかき立てられたアキラは我を忘れて腰を振るう。
ズチャ！　ズチャッ！　ズッチャ！　ズチャズチャッ!!
硬くなった肉棒が狭い処女肉を何度も押し広げては子宮口を亀頭でノックした。
「あらあら、まったくもう……アキラったら可愛い顔をしちゃって……わらわのことなん

て忘れてしまったのかしら？」
「あ、うっ……そ、そういうわけでは……」
娘とのセックスに夢中になっているところに、クリスティナがワザとらしくため息をつき拗ねたように流し目を向けてくる。
ドギマギしているとそんな年下の男の反応を楽しみながら、巧みな指使いでローズマリーの乳房を責め続けた。白魚のような女王の指が王女の乳房に食い込み、卑猥に形を変える姿に興奮はさらに高まる。
「ひぃン、あっ、ひぁっ……頭が変になりそうですわっ……奥に、アキラのペニスがゴリゴリ当たって……胸も熱くて、あひぃ……ミルクもびゅうびゅうと噴いてしまって……わ、わたくし……もう、ダメぇっ……」
気の強い王女の口から次々に飛び出す弱々しい言葉。その反応は自然と男の嗜虐心をくすぐり、自分が彼女を感じさせているという強い優越感に浸っていた。
ローズマリーもいつしか自ら腰を揺らめかせ、快感を求めて膣肉を射精直前でギン勃ちしたペニスに擦りつけている。
「僕も……もう、出そうですっ……」
異物を吐き出そうとするかのようにキツく締め付けてくる膣壁に激しくペニスを扱かれ、目の前では大迫力の搾乳ショーが繰り広げられている。熱くマグマのように湧き上がる欲望の塊が股間にこみ上げてきた。

「もう、ダメですよ……わらわにもアキラを感じさせて……」
少年が娘だけを感じて達することに嫉妬を感じたのか、クリスティナは娘の肩越しに首を伸ばしてキスをせがむ。淑女は唇を重ねるとすぐに唾液をたっぷり含んだ舌を口内にねじ込んでくる。
熱いベーゼを受け舌同士を絡ませ合っていると、そのまま舌が蕩けてしまいそうな快感で脳髄が痺れてきた。
「はぁ、あぁン……イヤぁ、アキラっ……お母様とキスしちゃダメですわぁっ……キスするなら……わ、わたくしと、ひぃンっ！」
少年と母親を引き離そうとするが、激しく膣奥にペニスを打ち込まれている王女は腕に力が入らないらしい。
荒い呼吸を繰り返しながら虚ろな瞳で口付けをする二人を見つめている。
「ちゅ……ちゅる、ンちゅっ……マリーも、アキラも我慢しなくていいのですよ……」
キスを中断した淑女の唇が優しく囁く。
「……は、はいっ……ローズマリー様も、一緒にっ……」
女王の許可をもらった少年はがむしゃらに腰を振った。すでに我慢の限界に達していたが、自分に処女を捧げてくれた美少女と一緒に絶頂を味わいたくて必死に射精を堪える。
「あンっ、あンっ、あぁンっ！　い、一緒に……？　な、なんですのっ……」
ローズマリーはアキラが何を言っているのか分からないようだが、急にピストンの速度

が上がりまともにしゃべれなくなっていた。力の入らない腕を必死に伸ばして少年の身体に抱きつこうとする王女。
「一緒にイキましょう！　もう、出ますっ!!」
しなやかな四肢が痙攣を始め、膣内が激しく収縮を繰り返した。まるで精子を搾り取るかのよう膣肉は蠢き、絶頂寸前のペニスを締め付けてくる。
「うふふ……快感を共有するのですよ……」
そう言ってクリスティナはローズマリーの乳首を強く摘んだ。同時に両乳から勢い良く大量のミルクが噴き出し、乳肌や少年の身体を濡らしていく。
ぷしゅっ、ぴゅるるっ……ぴゅうぅぅっ！
「ひぃあぁぁッ！　胸がっ……ミルクが出てしまいますわっ！　そ、それに……頭が変になって……はぁ〜〜〜ンっ!!」
射乳と共に王女は金髪の巻き毛を振り乱し、大きく身体を仰け反らせながら喘いだ。
「うぅっ……僕もイキますっ！」
ついに少年も限界に達し王女の膣奥に深々とペニスを突き立てたまま果てる。
ドビュ！　ドビュビュッ!!　ビュルルルゥゥゥ〜〜〜ッ!!
「あぁっ、な、中にぃ……アキラが……熱いですわぁ……」
女王に後ろから抱きしめられた状態で脱力するローズマリーはぼんやりと宙を眺めながら大量の精液を膣内で受け止めた。その表情からは普段の刺々しさは消え、好きな異性と

一つになれた悦びに染まり、トレードマークのツリ目も快感で蕩けている。
「はあぁぁぁ……気持ちいい……」
美少女の膣にこれでもかと種付けした少年はなんとも情けないため息を漏らしながら絶頂の余韻に浸っていた。
「どうですか、マリー？　これが女の幸せですよ」
「女の……幸せ……あはぁっ……」
王女が母親の言葉を噛み締めるように復唱していると、アキラが射精を終えてペニスを引き抜く。そのせいで王女の膣からはドプドプと、おびただしい量の白濁液が逆流して膣口から流れ出てきた。
（僕、ローズマリー様とセックスしたんだ……）
所々に血が混ざりピンク色になっている精液を見ていると申し訳ない気持ちと、処女を捧げてくれた嬉しさがこみ上げてくる。
それに王女は自分に好意を寄せてくれていることも分かった。思わず大股開きの状態で荒い呼吸を繰り返している少女を抱きしめようとした時――。
「さあ、アキラ……次はわらわの番ですよ」
娘を解放したクリスティナが今度は真正面から抱きついてくる。
「うわっ！　え、な、何がですか……？」
不意を突かれた少年はなんの抵抗もなくベッドに仰向きに押し倒された。そしてその上

にすっかり発情した牝の顔になった女王が跨がってくる。
「何が、ではありません。わらわを焦らそうなんて、そうはいきませんよ……」
「ちょ、ちょっと、お母様！　アキラはわたくしの夫なのですから、勝手にそういうことをするのはやめて欲しいですわっ‼」
しばらく放心していた王女が四つん這いになって近づいてきた。そして妖艶な笑みを浮かべてすっかりその気になっている母親を押しのけようとする。
「あら、アキラがわらわを抱くかを決めるのはアキラ自身ですよ。それにアキラがマリーの夫になるなんて決まっていないでしょう？」
「なっ……わたくしの処女を捧げたのですから……その、責任を取って……お嫁さんにしてもらいますわっ！　絶対に大事にしなさいよねっ‼」
挑発的な言葉を真に受けたローズマリーは顔を真っ赤にしながら睨みつけてきた。
「い、いきなりそう言われましても……」
逆プロポーズを受けて慌てる少年だが、股間の逸物は射精したばかりだというのに女王の手に握られてムクムクと硬度を取り戻す。
「ほら、アキラだってわらわを抱きたいと言っているではありませんか」
「そ、それは……浮気は許しませんわよっ！」
大人気なく勝ち誇るクリスティナと悔しそうに口をへの字に曲げるローズマリー。一人の男を取り合い対峙する、いわゆる修羅場というやつだ。

言葉の意味くらいは知っていたが、まさか自分がその当事者になるとは夢にも思っていなかった。

「大丈夫ですよ、マリー。アキラは二度や三度くらいで満足しませんから」

「それでしたら次もわたくしですわ！　むしろ次の次もずっとわたくしの番ですわ！」

「欲張りすぎですよ。順番に楽しみましょう。ね、ア・キ・ラ・♪」

期待に瞳を爛々と輝かせる美女と美少女。勝手に予約は埋まっていき、これは朝まで寝かせてもらえそうにない。

アキラは覚悟を決めるしかなかった。

そんな初心なお姫様が堪らなく愛しい。
「それじゃあ、いきます……」
逸る気持ちを抑えつつ、ミルクシャワーですっかり勃起している逸物の先端を王女の股間に押し当てる。
「ま、待ってくださいっ……キスっ、キスして欲しいですっ……」
優しくすると言いつついきなり挿入されそうになった王女は慌てて少年の手を掴んだ。
「すみません……それでは失礼します……」
気を取り直して顔を近づけると、ステラはまた目を瞑ってしまう。そんな恥ずかしがり屋の王女のご希望通りに口付けをすると、赤かった頬がさらに真っ赤になる。照れている少女の顔を見ているとこちらも胸がドキドキとしてきた。
「なんですの……わたくしの時はそんなキスしてくれなかったのに……」
「それではあとでお願いしないといけませんね」
「べ、別に……羨ましいとかそういうわけではありませんわっ……」
初々しいカップルのような二人のやりとりを女王は微笑ましげに、ローズマリーは面白くなさそうに見つめていた。
他人に見られながらというのは恥ずかしいが、今はステラに集中する。
「それでは今度こそ……」
再び膣口にペニスを添えると、彼女は無言で頷いた。

一途に自分に好意を寄せてくれていた王女の想いに応えるべく、ゆっくりと腰を突き出していく。

お湯とは違う液体で濡れた女陰に亀頭を押し付けると、にちゅりと性器の粘膜同士が密着した。

「あっ……アキラさんっ……」

破瓜の恐怖に耐えられなくなったのか、ステラが腕を掴む。やめますかと視線で問いかけるが、王女は首を横に振った。

「優しくしますから……」

細い手を握り返しながら、蜜で濡れた膣肉にペニスを押し込んでいく。一本の筋のようにぴたりと閉じていた膣口が押し広げられ、王女は苦悶の表情を浮かべた。

「はぁぁっ……い、痛っ……あ、ひぃ……」

ヒダは少なめだが、今まで体験した女性の中で一番締め付けが強い。異物を押し戻そうとするかのようにキュッキュッと膣壁がペニスに絡みついてくる。やがて逸物の先端が何かに触れ、少年は腰の動きを止めた。

「どうして……やめないでくださいっ……私は大丈夫ですから……」

かなり痛いのだろう、それでも王女は泣き笑いを浮かべながら挿入を懇願する。そこまで自分を求めてくれるステラの気持ちが嬉しくて胸の奥が熱くなってきた。

「分かりました……でも、無理そうだったら言ってください……」

王女の身体を気遣いながら挿入を再開すると、再び先端が何かにぶつかる。
一瞬躊躇ったが、意を決して腰を突き出しペニスを押し込んだ。
「ひぃあぁぁぁっ……あ、うっ、ンあぁぁ……」
ブチッ――と薄膜を突き破る感覚。ついに少女と一つになり、興奮で胸が高鳴る。
（あぁ……僕ステラ様とセックスしてるっ……）
大きな瞳を剥き、痛みに耐えている王女の姿に心が痛んだ。しかしそんな少年の気持ちを察したのか、お姫様は必死に笑顔を作りながら微笑みかけてくる。
「私は……大丈夫ですから……アキラさんに……処女を捧げられて……とても嬉しいんです……これはうれし涙ですから、気にしないでください……」
「ステラ様……」
半分本当なのだろうけど、やはり相当痛いのだろう。しかしここでそれを追及しても仕方のないこと。それに今にも射精してしまいそうなほど処女肉の締め付けは激しく、アキラは少女の言葉に甘えて腰を使い始めた。
「あ、あぁ！　ン、んぁ……好きに動いてください……」
ゆっくりとペニスを引きずり出していくと、結合部からは大量の愛液が溢れてくる。まだ硬さの残る膣内は締め付けが強すぎて、肉棒を抜き挿しするだけで一苦労だった。それでも肉ヒダは少なめだがキュッキュと締め付けてくる膣壁とペニスが擦れ合い、あっという間に股間に甘美な痺れが広がっていく。

「ステラ様っ……そんなに締め付けられたら、すぐに出てしまいます……」
経験の浅いペニスは処女肉の心地良さに翻弄され、すぐに射精欲がこみ上げてくる。しかしもっと王女とのセックスを味わいたくて、必死に下半身に力を入れて耐えるが無意識のうちに腰は快感を求めて律動を刻み始めた。
「あぁ、アキラさんが……中で、動いてるのが分かりますっ……」
愛液で濡れた膣肉と男根が擦れ合うたびに王女の身体はうねり、熱っぽい吐息のこもった嬌声を上げる。王国一の美少女と呼び声の高いステラが、大きく足を開きペニスで貫かれ喘いでいるのだ。最高の興奮状態を味わいながら、腰を前後に揺らした。
「ステラ様の中、とても温かくて、キツくて……最高に気持ちいいです……」
「ンっ、そう……言ってもらえると、私も嬉しいですっ……」
王女が目を細めると目尻に溜まっていた涙の粒がこぼれ落ち、綺麗な金色の長髪の中へと消える。
その姿を見た瞬間に、たまらなく彼女が愛おしくなった。腰を動かしながら抱き合うように身体を密着させてキスをしようとすると、ステラも瞳を閉じて唇を差し出してくる。
「ちょっとお待ちなさい！」
甘い口付けを交わそうとした時、不意に腕を引っ張られた。
「え……ロ、ローズマリー様っ⁉」
振り返ると面白いくらい頬を膨らませているローズマリーが、目尻をツリ上げこちらを

睨みつけてくる。
「お姉様ばかり……イチャイチャしてズルイですわっ……」
まるで恋人同士のようにじゃれ合う二人を見て、嫉妬深い王女はとうとう耐えきれなくなったようだ。少年を引っ張り起こして姉とのキスを阻止する。
「あ、ンんっ……マリーったら、邪魔しないでよぉ……」
「わたくしをのけ者にしようなんて、そうはいきませんわよ」
ステラは不満げに口を尖らせるが、妹姫は聞く耳を持たない。それどころかアキラの腕に抱きつき、自分の唇を押し付けてきた。
「ローズ……ンン⁉」
「あぁ！　な、何してるの⁉　やめてよ、マリー！」
セックスをしている時に相手の男が他の女とキスしているのだ。優しいステラもさすがにそれは許せないらしく声が大きくなる。
「そんなに怒らないで、ステラ。わらわも仲間外れはさみしいですから、二人がもっと気持ち良くなれるように手伝ってあげましょう」
まるで獲物を見つけた牝豹のように四つん這いで近づいてきたクリスティナまで少年の首に腕を絡ませてくる。そして妹姫と少年のキスに割り込む。
「ちょっ、と……んちゅ、お母、さま……ちゅ、ちゅぅっ……」
「ふふ……いいではないですか……はむ、ぴちゅっ……ン～、ちゅっ♪」

左右から爆乳で挟まれ身動きの取れなくなったところで、口内を二枚の舌が舐めまわしてくる。今まで思考はステラ一色に染まっていたが、両腕に押し付けられるおっぱいの存在が気になって仕方ない。

「そんなこと、していただかなくても大丈夫ですっ……」

少年が自分だけを見てくれていないことに気づいたのか、ステラは思いっきり不満を露わにする。

「そう遠慮せずに……ほら、こうされると気持ちいいでしょう……」

女王は娘をなだめながら手を伸ばした。頭を撫でてあげるような口調だったが、その手のひらは綺麗なお椀型の美乳を鷲掴みにする。

「ひゃぁん！　な、なんですか、急にっ……あ、あぁっ……」

同性同士だけあって感じるポイントを熟知しているのか、クリスティナに胸を揉まれながらステラは甘い吐息を漏らす。そのたびに膣内は激しく収縮し、ペニスをキュッキュッと締め付けてくる。

「そうです、マリーはアキラの乳首を舐めてあげなさい」

「どうしてわたくしがそんなことを……」

母親の提案に妹姫は意味が分からないと言いたげに眉を顰めた。

「あら、殿方だってここを舐められると感じるのよ。アキラなら、すぐに射精しちゃうのではないかしら……」

「……分かりましたわ、次は絶対にわたくしの番ですわよ」
女王が何を言わんとしているのか気づいたらしく、ローズマリーは胸板に顔を寄せまるでキャンディーでも舐めるかのように乳首を舐めてきた。
「う、うわっ！　それはっ……むンっ！」
ざらざらとした王女の舌先が触れた瞬間に、電流を流されたかのような刺激が胸から全身に走る。思わず情けない声を上げてしまった少年の口に、クリスティナの艶やかな唇が再び吸い付いてきた。
（クリスティナ様のキス激しすぎる……しかもローズマリー様のおっぱいが当たって……乳首も痺れてきたし……うぁぁぁっ！）
唾液をたっぷりと含んだ舌が絡みついてきて、脳が蕩けそうな感覚に陥る。無意識のうちに腰は律動を再開し、キツく狭い処女肉を抉った。
「あ、はぁん！　アキラさんっ、激しいですっ……」
先ほどまでは王女を気遣ってゆっくりとした挿入を心がけていたが、快感を自分でコントロールできなくなったせいで少年の腰使いは荒くなる。
「本当に、こんなところを舐められて気持ちいいんですの？」
ローズマリーがペロペロと乳首を舐めながら上目遣いに見つめてきた。女王にキスで口をふさがれているため言葉が出せないので無言で頷くと、納得したのかそれ以上何も言わずに舌奉仕を続ける。

（うぅ、もう出そうになってきたっ……）

ステラとのセックスは自分が責めている感覚だったが、今は同時に二人の美女から舌と口で責められ、未知の快感が全身を駆け巡り射精欲が急速に膨らんできた。

「ンっ、ちゅっ……ぷはぁ……アキラ、遠慮せずにイっていいのですよ……」

クリスティナは恍惚とした表情を浮かべながら耳元で囁く。娘の乳房を揉んでいる手とは反対の手で自分の胸も揉みしだいているせいで、次々にミルクが溢れて甘ったるい香りが辺りに漂う。

「い、いぃンっ、頭がボーっとして……私、変になりそうですっ……」

腰を突き動かすたびに左右に押し広げられた両脚が跳ね、形のいい美乳が皿の上のプリンのようにゆらゆらと揺れる。膣内は蜜でびしょ濡れ状態で、粘膜が擦れ合う淫らな水音と荒い吐息が浴場に響き渡った。

「ほら、さっさと……イキなさいよっ……」

いつしかローズマリーまで自分の爆乳を両手で持ち上げるように寄せてアキラの身体に押し付けてくる。胸に顔を埋めているので、ちょうどお腹の辺りで弾力ある柔らかい乳肉が押し潰されイヤらしく変形していた。

コリッとした感触のある先端からはミルクが滲み、またしても全身に乳液を塗りたくられてしまう。

「ステラ様、申し訳ありませんっ……もう、我慢が……」

クリスティナとローズマリーの愛撫で理性を狂わされたアキラは、テクニックも何もない若さに任せた激しい腰突きを繰り返した。
「も、もうっ……さっさと終わらせなさいよね！」
文句を言いながらもローズマリーは乳首を舐めるだけでなく、チュウチュウと吸い付いてくる。男なのに乳首で感じてしまうのは恥ずかしいが、どうしようもなく気持ちいい。
「私も、ダメです、おかしくなってしまいます！　あぁっ、ひぁぁぁっ！」
王国一の美少女が全身から発汗し、あられもない嬌声を上げてよがっている。彼女のこんな姿を見たことがあるのは世界でただ自分だけだ。
（や、やばいっ……出る！　もう、出る、出るっ、出るっ！）
女を貫き征服する牡の悦びを感じながらも、童貞を卒業したばかりのペニスはすでに限界に達していた。尿道を熱い欲望の塊が駆け上がる。
「いいですよ、二人ともイキなさいっ……」
クリスティナの舌を貪りながら、両手でステラの細腰を掴んで固定して思いっきり腰を叩きつけた。
「ステラ様、僕もうイクっ！」
必死に我慢したが、ついに絶頂に達した男根が王女の膣内で爆発する。
ドビュゥゥゥ！　ビュ、ビュ、ビュルッ!!　ビュブブゥゥゥ〜〜〜ッ!!
「あひぃぃぃ！　で、出てますっ……中に、たくさん、はぁぁぁンっ!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

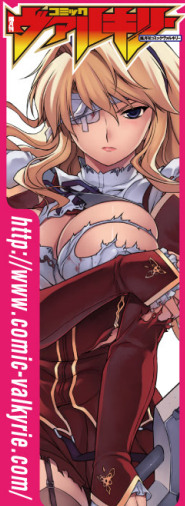
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！